

## VI 心の支えとなる人 (Q6)

### 1 調査結果の概要

高齢期において「心の支え」となるのは、どのような人たちなのだろうか。「配偶者あるいはパートナー」「子ども（養子を含む）」から「その他」までの8項目の選択肢を用意し、複数回答で回答してもらった。図3-25は、国別に8項目の選択肢の肯定率を積み上げたものである。複数回答の合計比率に注目すると、日本187.1%、韓国141.8%、アメリカ298.3%、ドイツ186.3%、スウェーデン226.6%となる。したがって、各国の高齢者が挙げた「心の支えとなる人」の平均人数は、アメリカでは2.98人、スウェーデンは2.27人、日本1.87人、ドイツ1.86人、韓国1.42人となり、全般的にアメリカの数値の高さが際立っていた。なお、図3-25には記していないが、本設問にはもう一つ「誰もいない」という選択肢が用意されている。その比率は、日本2.7%、韓国6.2%、アメリカ3.2%、ドイツ3.8%、スウェーデン0.5%と、いずれの国でも高いものではなかった。

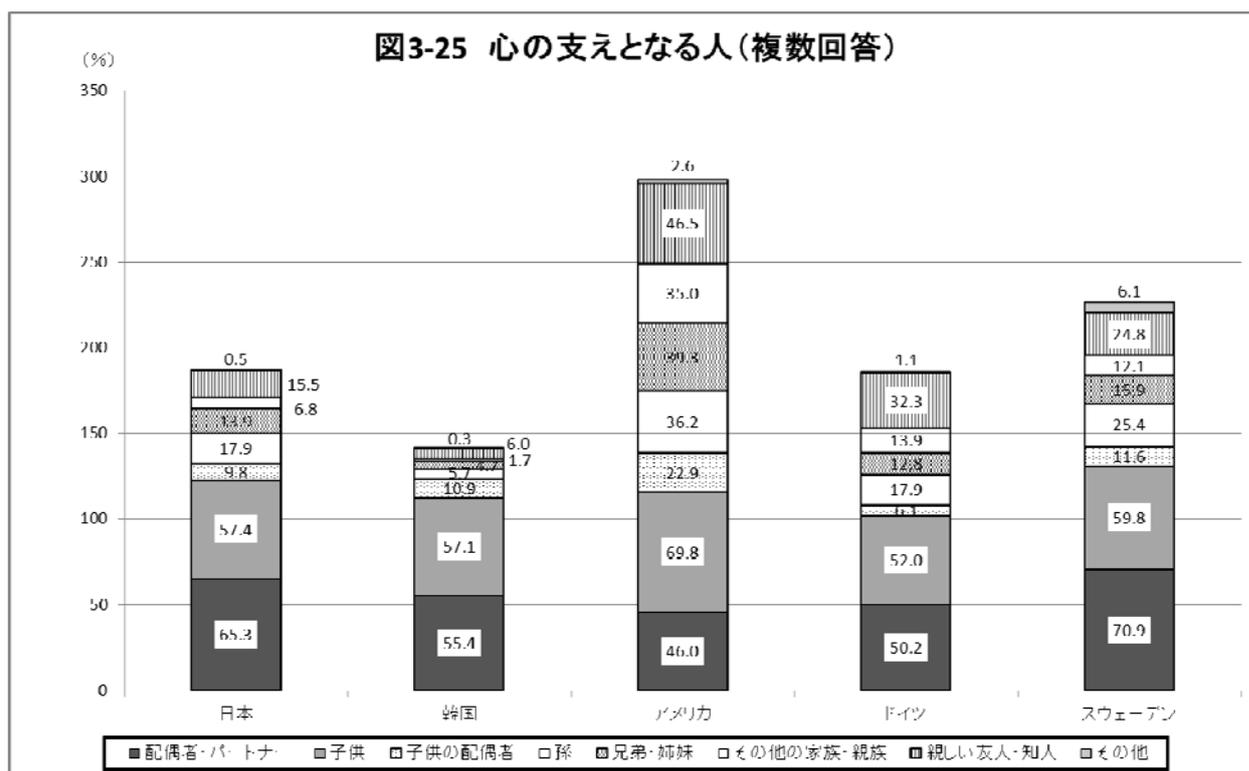
では、「心の支えとなる人」としてどのような人が挙げられているのだろうか。5カ国を通じて大きな比率を占めているのは「配偶者あるいはパートナー」と「子供」である。「配偶者あるいはパートナー」を挙げたものの比率は、スウェーデンが70.9%と最も高く、以下、日本65.3%、韓国55.4%、ドイツ50.2%、アメリカ46.0%という状況であった。また「子供」については、アメリカが69.8%と最も高く、以下、スウェーデン59.8%、日本57.4%、韓国57.1%、ドイツ52.0%となっていた。スウェーデンと日本では、子どもより配偶者を挙げる人の比率が10ポイント前後高いのに対し、アメリカ、ドイツ、韓国では配偶者より子どもを挙げる人のほうが多い。とりわけアメリカにおいて、子どもを挙げる人が配偶者を挙げる人の比率に比べ20ポイント以上高くなっていることに注目したい。

ただし、図3-25は、配偶者、あるいは子どもがいないという人も含めた単純集計結果となっていることには留意しなければならない。とりわけ配偶者に関しては、すでに亡くなったという人が少なからずいる。各国において、「心の支えとなる人」として「配偶者あるいはパートナー」を挙げる人の割合と、同居している配偶者がいる人の割合（第2章参照）の差はせいぜい5ポイント程度であり、ほぼ似通った数値を示している。したがって、「配偶者あるいはパートナー」については、健在でかつ同居をしていれば、一般的には「心の支えとなる人」と感じられるのではないかと推測される。

もう一つ注目したいのは、「親しい友人・知人」を挙げるものの比率の差異である。アメリカの46.5%を筆頭として、ドイツ32.3%、スウェーデン24.8%と、欧米3カ国では相

対的に高いのに対し、日本は 15.5%、韓国は 6.0%と、低い値を示していた。

全般的に、日本と韓国において高齢者の「心の支えとなる人」とみなされるのは、「配偶者あるいはパートナー」と「子供」に限定されるのに対し、欧米3カ国、とりわけアメリカでは、孫やきょうだいなどその他の親族、そして友人・知人に至るまで、多様な存在が挙げられるところに特徴がある。

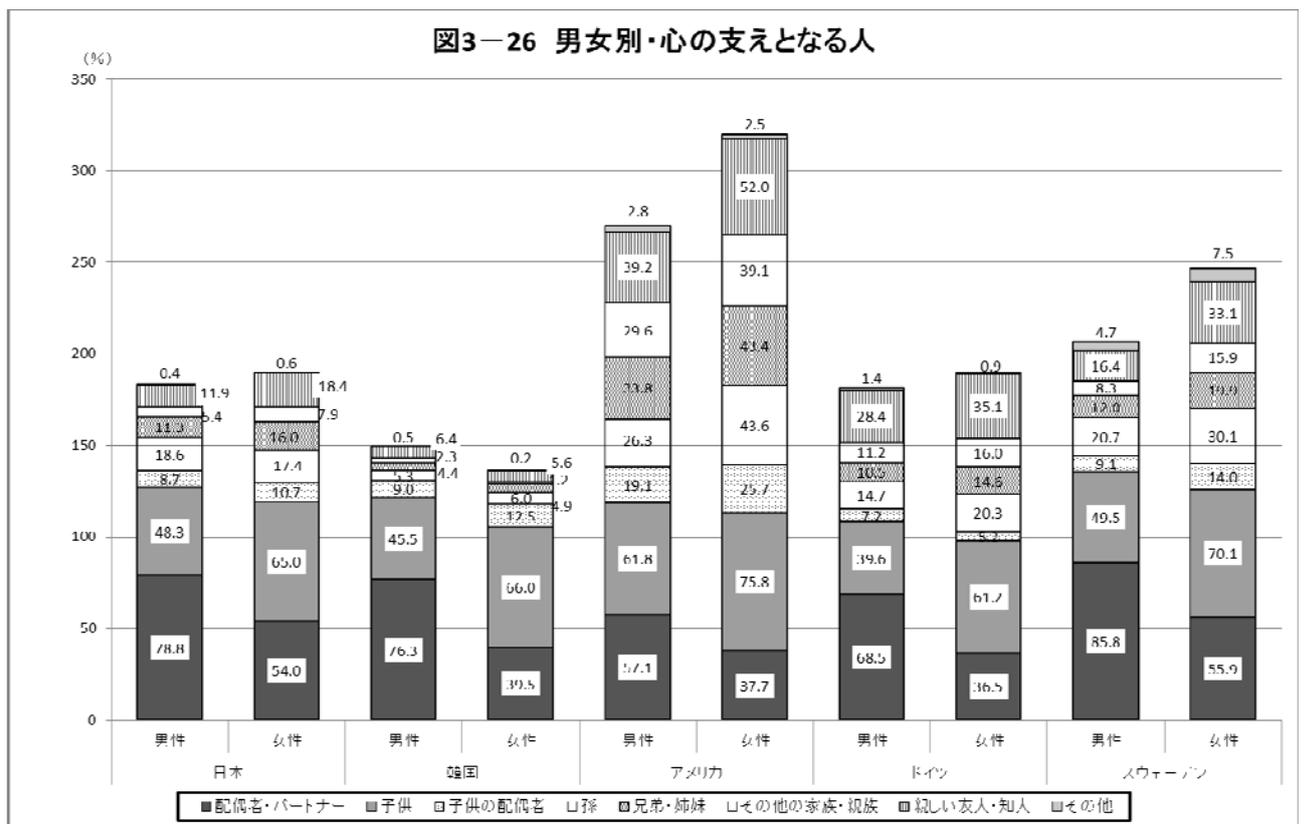


## 2. 男女別比較

図3-26は、この設問に対する各国高齢者の回答を男女別に示したものである。複数回答の合計比率に注目すると、アメリカとスウェーデンでは男性より女性の比率が50ポイント前後高い傾向が示されているが、他の3カ国では著しい男女差はみられない。

しかしこの合計比率の内訳、とくに「配偶者あるいはパートナー」と「子供」を挙げる人の比率をみると、5カ国に共通する男女の違いが確認できる。いずれの国でもこの2つのカテゴリーを挙げる人が男女ともに多く、またこの2カテゴリーの合計比率における男女差は小さいとはいえ、男性は配偶者を、女性は子供をより多く挙げる傾向が確認できる。日本についていえば、「配偶者あるいはパートナー」を挙げるものは男性78.8%、女性54.0%で、男性が25ポイントほど高い。また「子供」を挙げるものは、男性48.3%、女

性 65.0%と、女性のほうが 17 ポイントほど高かった。他の 4 カ国においても「配偶者あるいはパートナー」を挙げる比率は、女性に比べて男性が高く、その差は、韓国 37 ポイント、ドイツ 32 ポイント、スウェーデン 30 ポイント、アメリカ 19 ポイントであり、アメリカ以外は日本よりも大きな男女差が示されていた。ただし、この結果を評価するにあたって、高齢期における有配偶率の男女差は考慮に入れなければならない。



### 3. 年齢階層別比較

前項でみたように、「心の支えとなる人」との関係性については男女差が大きく、その背景には有配偶率の男女差があるものと思われる。高齢者の場合、有配偶率は年齢階層が高いほど低下し、また男女の有配偶率の差も大きくなる。したがってここでは、各国の男女別・年齢階層別の「心の支えとなる人」の傾向性をみることにしよう。

図3-27によると、各国の男女ともに「配偶者あるいはパートナー」を挙げるものの比率は年齢が高くなるにしたがっておおむね低下しており、この推移は第2章でみた性別・年齢階層別の有配偶率の変化にほぼ対応している。したがって、年齢階層の上昇にともな

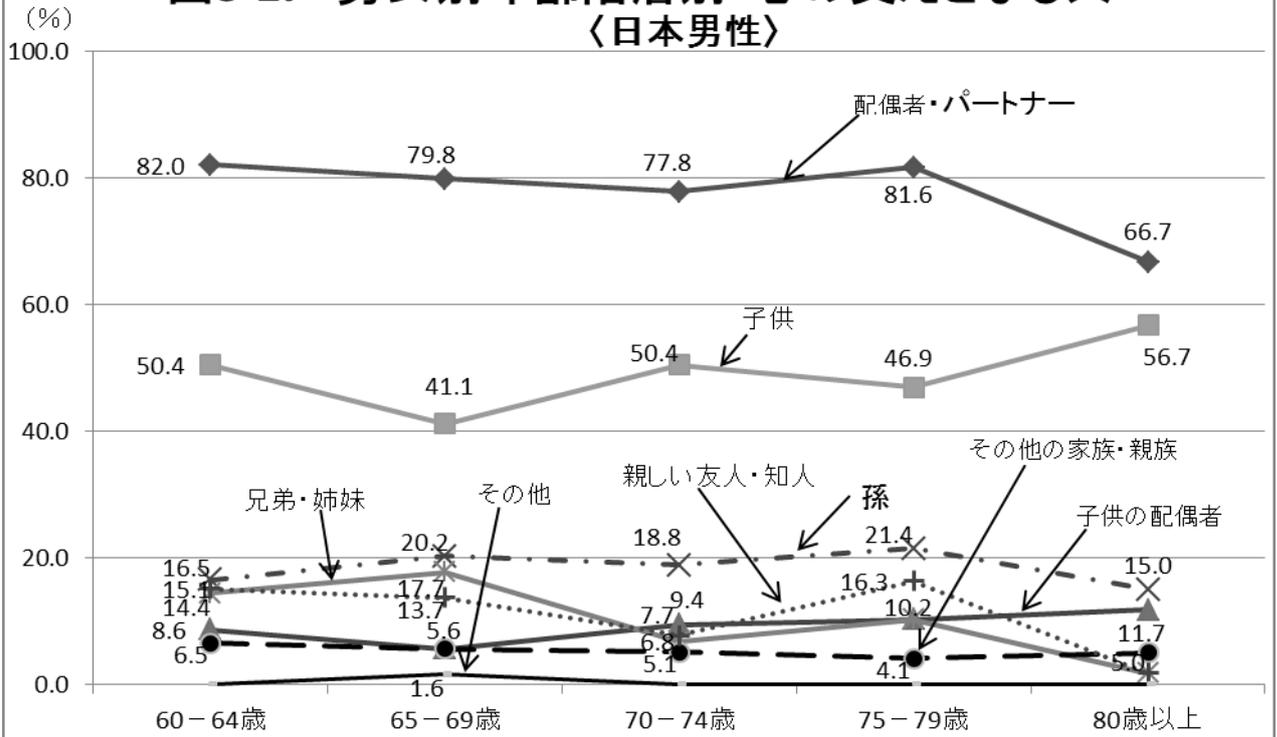
うその比率の低下は、男性に比べて女性のほうが顕著である。そして、配偶者の不在を補うかのように、「子供」を挙げる人は年齢の上昇とともにおおむね増加する。とりわけ女性は、いずれの年齢階層でも「子供」を挙げる人の比率が男性より高く、有配偶率の男女差だけでは説明できない差異を示している。

なお、アメリカは、現在配偶者あるいはパートナーと同居している人が、総数レベルで46.7%と他の4カ国に比べて10~25ポイント程度低いこともあって（第2章参照）、男女ともに「配偶者あるいはパートナー」が全般的に高い比率で挙げられることはない。アメリカにおける離婚率の高さも影響しているものと思われる。

それ以外の親族カテゴリーの内、「孫」や「子供の配偶者」との関係は、高齢になっても比較的維持される傾向が複数みられる。「兄弟・姉妹」については、対象が限定されており、また互いに高齢になって亡くなる場合もあることから、年齢とともにおおむね低下する傾向が確認できる。

「親しい友人・知人」を挙げる人の比率については、高齢になっても比較的高い水準で維持されている場合もあり（アメリカ男性・女性、ドイツ男性・女性）、加齢とともに必ずしも一方向的に低下していくわけではない。全体としては、年齢階層の高まりによる友人づきあいの衰退は、みられるとしても著しい低下とはいえず、高齢期の全過程にわたり一定の役割を果たしているといえる。

図3-27 男女別年齢階層別・心の支えとなる人  
〈日本男性〉



〈日本女性〉

